



AIと研究について思うこと

最近話題のChatGPTを使ってみた。質問を入れてみるとすぐに答えを返してくる。試しに文章の要約をお願いすると、すぐにそれらしいものを返してきたが1,000字以内と制限したのに1,000字の時点では途中で内容が終わってしまっていた。まだ続きがあるのかと質問すると、また続きを書き始めた。まだまだ発展途上の技術であることは否めないが、全く新しいことが始まりつつある予感は大い。

私はやったことがないが、マクロのようなプログラムもすぐに書いてくれるようだ。作りたいプログラムを伝えるとだいたい書いてくれるので、それをファインチューニングすれば自分の欲しいプログラムができ上がるということだ。ChatGPTにフルに能力を発揮させるには、いかに答えを導きやすい質問をするかが重要で、アメリカでは「ChatGPTに適切な質問をする専門家」が職業として成立しているらしい。危険性や正確性に関する問題が存在するのは、ここで私があえて述べるまでもないが、これからは日常生活も研究もAIありきで進んでいくのは確かだろう。

翻訳ソフトの発展も然りである。最近、論文の内容をざっと把握したい時にはなくてはならない存在になっている。やはり日本語で読んだ方が圧倒的に早く理解できる。

ついには、簡単な英文なら日本語で書いたものをAIに訳してもらい、体裁を整えることでわりとまともな英文が書ける時代になってきた。また文法チェッカーなども非常に役に立つ。どうしても冠詞などの細かい表記については最終的には文法チェッカーに頼ることになる。AIのお世話になりながら日本語ベースで研究論文を読む機会が増えると、英語が母国語の人は毎日こうやって母国語で研究できているのだなあと思ってしまう。将来的には日本語で論文を書いて、そのまま投稿できるようになるのであろうか。便利になってよいと思う反面、中学生や高校生の時に、単語帳を活用したり、文法について悩んだり、辞書を片手に（途中から電子辞書も使い出した）英語のペーパーバックを読んだり、苦勞して英語を勉強した時間は一体何だったのだろうか。無駄だったのだろうか。

最近、学生から効率のよい勉強に必要な要点のまとまったレジюмеが欲しい、という話をよく聞く。我々もなるべくわかりやすく講義するよう心がけているつもりであるが、やはり重宝がられるのは、よくまとまったレジюмеの方だ。最近では分厚い教科書を持っている学生は少なく、要点のまとまったテキストが人気である。昔はそんなテキストがなかったから、自分で勉強方法を工夫してきた。こういう経験をしてきたから、未知の事柄にも柔軟に対処できるのだ！と思いたいのは、やまやまののだが、彼らのほうがはるかに柔軟に物事に対処できる……やはり、新しいものは素直に取り入れ、積極的に活用していくのが良いのだろう。あくまでこちらが主体となり、AIをうまく利用する分には、

(大トトロ)